

## 鷗外の天皇機関説―

### 「興津弥五右衛門の遺書（初出）」について

吉 成 春 菜

#### ― はじめに

一九一二年の明治天皇崩御にともなうて、乃木希典大將が自刃したことは国民に大きな衝撃を与えた。内田魯庵は「大抵の人が乃木將軍で忙し」く、新聞は乃木の記事を連日「満載」していると日記に書いている。芥川と志賀も批判的ではあるが、記述を残している。その中で鷗外と並び称される漱石は二年後に書き始めた『ころ』で、その死を直接的に扱っている。対して、鷗外は崩御に従い殉死した乃木希典を「明らかに称賛している」と言われる「興津弥五右衛門の遺書」（以下「興津」とする）を乃木の死後すぐに『中央公論』に発表した。

この二つの作品の相違点は①発表時期に加え、②作品内時間すなわち作品の舞台が『ころ』では明治末から大正への転換期であるのに対し、『興津』は江戸時代であること、③乃木の殉死をモチーフとして直接的に扱っているか、比喻をつかって表現しているかということが挙げられる。

「花子」に見られるように現実をしつかりと捉える力を持っていた鷗外が乃木の死を単純に賞賛するとは思えなかったため、興味を持った。加えて初出と単行本『意地』（一九一三年）収録本文とは内容が大きく異なる事実から、鷗外の思い入れが強い作品と考え、まずは初出から検

討することとした。

#### ― 梗概

遺書はまず狂気に駆られて自殺するのではないという興津の主張ではじまる。次に細川忠興に仕えた武士であるという経歴を述べる。死後の始末を頼んだ上で、死ぬ理由となった事件を語る。

香木を買ってこいと主君に命じられ、同僚とともに長崎へ向かった。香木は見つかったが、本木と末木があり、伊達家の役人と競り合った。同僚が香木は大金を出すものではないと言い始め、切りつけてきたので討ち、香木を買い求めた。忠興は興津の考えを尤もとした。二年後、香木は天皇に献上された。興津は役目上とはいえ同僚を討ったことの責任を取り死にたいと思い続けていたが、忠興に重用され死ねなかったと述べる。

細川家を心配し、隠退後も死を延ばしていた。忠興の死後、残された子は越中守となり將軍との関係も良好なので、忠興の十三回忌に合わせ死ぬ。殉死は禁じられているが、数十年前の事件の責任を取るのだから罪には問われないと思うと述べている。

長年よくしてくれた和尚にこの遺書を見せてほしいと頼んだ所で、締めくくられる。そして、「皆々様」という宛先で遺書は終わる。

## 一― 典拠をめぐる

本文の後に一行空白を置いて、作者による後記がある。もとなつた史実があること、伝本が複数あり、事実関係に異同が見られることが述べられている。まず、典拠を確認しよう。追記から『翁草』<sup>(3)</sup>をもとにして、『徳川実紀』と『野史』を参考にしたことがわかる。竹盛天雄<sup>(4)</sup>は、全体的に『翁草』の巻之六「当代奇覽拔萃中」の「細川家の香木」に大きくよつてゐるとしている。尾形功は島原の乱と細川家の跡継ぎについての部分は『徳川実紀』を参考にしたのではないかという。藤田寛<sup>(6)</sup>は歴史学の観点から見て、同じ細川家を題材とした「阿部一族」では信頼できる史料である「細川家記」を参考にしてゐるのにもかかわらず、「興津」では初出・『意地』収録本文ともに従つてゐないと述べる。

竹盛<sup>(5)</sup>は鷗外日記に明治三十一年一月一七日の日記に『徳川実紀』と『野史』を、同年四月二二日の日記に『翁草』購入とあるが、『翁草』池辺本が出ると改めて購入していると指摘している。その理由は定かではないが、鷗外が香木事件もしくは実在の興津に強い思い入れを抱いてゐた可能性は高い。また、明治三十一年以来の足かけ一五年暖め、かつ資料収集がまだ十分ではなかつたにもかかわらず書き上げ、その上史料と相違させてゐることは乃木の死が鷗外にとって強い衝撃であり創作の契機であつたことを表している。

## 一― 三評価と先行研究

乃木の死との関連が初めてはつきり述べられたのは昭和十一年の斎藤茂吉<sup>(8)</sup>が著した論文であると佐々木充<sup>(9)</sup>は述べている。佐々木は発表当時にはほとんど気づかなかつたようであると述べつつも、加能作次郎の

同時代評を引いている。加能は「興津」発表直後に『早稲田文学』の十月の文壇欄で、「森鷗外氏の『興津弥五右衛門の遺書』(中央公論)は、久しく死処を求めて居た弥五右衛門が、先君の十五(ママ)回忌にその後を追うて自殺したときの遺言である。乃木大将の自殺と照らし合せて読めば面白い。」と書き、興津と乃木の関連にいち早く言及している。しかし、佐々木によればその後は『意地』出版後にたとえば佐藤春夫が「SACRILEGE―新しき歴史小説の先駆『意地』を読む」(一九二三年)で『意地』収録作品のうち、「阿部一族」を中心に論じ、「興津」については「私には面白くなかつた。」という記すのみであり、あるいは『三田文学』の新刊批評には、「興津」については『意地』収録の三作をまとめた「観察点の奇抜、人格描写の巧緻、時代の背景、これに加ふるに其扱るところの事跡また一々明らかなるに至つて読者の作者に敬服するもの益々深し。」という大雑把な分析しかないと述べる。

この状況はその後とも変わらず、茂吉が「興津」の執筆動機が乃木殉死にあることを明示し、それも

乃木大将の殉死行爲について、世の学者等は彼此いつてゐるが、  
己(引用注…鷗外を指す)の考はちがふ、といふこと

を小説で主張したものと述べてゐるのだとしている。

既に述べたように本作品は『中央公論』に掲載されたものの他に、単行本『意地』に収録された本文がある。先ず大きな相違点として家系図の追加、子孫についての細かな記述の追加が挙げられる。逸話も多分に加えられている。蒲生芳郎<sup>(10)</sup>は『興津又二郎覚書』『興津家由緒書』『忠興公御以来三代殉死之面々拔書』などの新史料の影響を指摘している。

竹盛天雄<sup>⑪</sup>は初出を「作者の異様な緊張ぶりをとどめている」とし、乃木の死に動かされたからであると述べている。一方、『意地』掲載本文にある殉死者の遺族が厚遇されているとの記述は鷗外が「阿部一族」につながる「歴史の自然」を発見したためであるとする。

蒲生芳郎は「主題そのものの変化はない」としている。初出を「全編パステイックな文体で統一された玲瓏たる詩」とし、また、別稿でより史実に近づけることにより、主題そのものをはっきりさせるために書き直したとしている。しかし、結果として作品内容を主題から逸れさせかけるまでに史料の正確さを求めてしまったとする。

加えて蒲生は本作品に乃木の死についての考えだけではなく、鷗外の天皇観が表れていることを指摘している。高級官僚の立場からの「危険思想対策」とされた「かのやうに」を執筆した時から、鷗外が守ろうとしているのは「天皇制神話」そのものよりは、天皇制国家の内部における近代の立場、合理の立場というようなものにはかならないとしている。三好行雄<sup>⑫</sup>も鷗外の歴史小説には現実時間内の批判、告発があると述べている。

しかし、神話を盲目的に信仰せず批判の目で天皇制を見ることは天皇を絶対的な存在とする明治政府の批判となるため、直接的に表現することとは高級官僚であった鷗外にとって危険なことではあつたはずである。批判を隠し、また単なる史伝と受け取られないように、本作品が虚構であり、かつ創作であることを強調する必要があつた。史実によつていことが編集後記や別の機会ではなく、作者による後記、すなわち作品の中に記述されていることはそのためであると考える。タイトルを『翁草』を踏襲し「細川家の香木」ともせず、乃木の残した「遺言條々」の「遺言」も使わずに、「遺書」と名付けたことも効果を強める狙いがあつたとみる。

本論では蒲生の指摘を踏まえて、鷗外が天皇という存在をどう捉えていたかを中心に読み取りたい。

## 二 興津と乃木の共通項

漱石は乃木の死についての構想を五年もの歳月をかけて練つた一方で、鷗外が本作品を多くとも五日間<sup>⑬</sup>で書き上げた。鷗外は漱石に比べこの問題を軽んじていたというわけではなく、史実の力を使うことでしたすぐに国民に伝えようとしたのであろう。

乃木の殉死について竹盛天雄<sup>⑭</sup>は一九六八年に

乃木の忠誠の対象が『国禁』をやつる国家体制になく、明治天皇個人に向けられたものであり、乃木の殉死は、君臣一体の心情的倫理の完成にほかならなかつた。

と述べているが、死ぬことだけが明治天皇個人への忠誠の証明、死なずに仕事をし続けていれば明治天皇個人ではなく、国家体制に忠誠を尽くしていることになるという論理には賛成できかねる。明治天皇の遺志を汲むために働くこと、例えば老いても学習院長を務め続けて明治天皇の子孫や親戚である皇族を第二、第三の明治天皇になるように教育したり、言論活動を行つて明治天皇の方針を死後の世の中に生かしたりすることは、政府や大正天皇ではなく明治天皇に仕えている状態を持続させていると見なすことができよう。

乃木の死は一般には明治天皇を慕つての殉死と考えられている。辞世の歌「神あかりあかりましぬる大君のみあとはるかにをろかみまつる」の歌「うつ志世を神さりました大君のみあと志たひて我はゆくなり」<sup>⑮</sup>だけを

みると、この考えは誤っていると切り切ることではない。しかし、遺言状に「自殺」の記述と「明治十年之役ニ於イテ軍旗ヲ失ヒ其後死處得度心掛候モ其機ヲ得ス」との記述がある。主君を追つての殉死ではなく引責自殺であると解釈するに十分な事実であろう。主君を慕つての死とする説は遺書の記述を軽視して成立しているのではないか。佐々木充は殉死と軍旗紛失事件との関連および遺言状の解釈について、「乃木が征討総督有栖川陸仁親王としてあらわれたところの明治帝の意に不満足であり抗議したという読み方」「帝が罰してくれないのなら、もはや自分で自分を罰するまでだ」という見識を示し、乃木の死に殉死の意味は全くとなく彼自身の遺言状通りただの引責自殺であり、そこには天皇への不満といらだちがあつた可能性も示唆している。鷗外は作品の中で興津が責任を取ることを自分で決めて死んだということを強調することで、まず当時天皇を追つての殉死者であるとされた乃木の本意を代弁しようとしたのである。茂吉は「ハイカラ學者に説いた」と言うが、鷗外は広く知らせるために、知識人に広く読まれる当時の一流雑誌であつた『中央公論』に発表したかと考える。鷗外日記には社から要請されたなどといった執筆事情の記述はなかつた。

乃木と興津は共に明治天皇、將軍の出した自殺（実際の名称は飛び降り禁止令であるが、国民は自殺そのものがめられたと捉えたはずである）・殉死禁止令を無視している。このことから、天皇ならびに將軍などの権力者の制定した法律は一代限りであり、個人の権力は持続しない、絶対的な物ではないという認識を二人は共有していることがわかる。この二人を賛美している鷗外は思想の上でも制度の上でも天皇を神格化することには反対する立場を表したと解釈することも十分に可能である。

### 三 興津の持つ近代性

「興津」とは違い、「こころ」と同じ明治時代を舞台とする「かのやうに」「藤棚」「鉋一下」「吃逆」の秀麿ものと呼ばれる四連作の主人公五条秀麿は敬意を巡って悩む。「かのやうに」の前半では自室に山田有策の言うところの自分の「世界」を作り出して引きこもっている。神話を實際に怒ったことと信じきつてはいないが、小林浩一郎によると日本の「お国柄」を支えるために事実としたままにする方がよいと考えている父に自分の歴史研究を認めさせたいと願う。「鉋一下」の秀麿は自分もしくは知人が高い身分を持つ人への挨拶を拒否されたことを書き留めて、家の中で最高の権力を持つ父や身分が上の人を敬うのが当然とする家父長制や身分制度への反抗を始めている。しかし、「吃逆」で登場する立派な事業を行っているが、子爵家の跡取りである自分から見ると高い地位や身分を持つていゝるとは言いがたい知り合い二人に感動はしても尊敬を表せず、芸者を「あなた」と呼ぶことはできなかった。反抗を行動で表すことができない点で秀麿は興津より近代的ではない。

宮崎隆弘は「興津弥五右衛門は徳川時代の武士というよりは、創造的な近代の個人主義者に近いのである。」と述べている。興津は主君、幕府、他の人の意向を一切参考にせず、自分の考えのみに従つて行動し、死に方も決めた。この姿勢は身分に抑圧されていた近世の考え方に染まつてしまつていゝとは考えられず、今日から見ると実に近代的である。

次に興津が残した遺書の謎について考えよう。興津は最後の言葉の宛先を明記せずに死後の身辺整理を頼んでいる。福本彰はこの理由を



「皆々様」宛にしたのは、特定の人間だけにわかってもらうのでは困るという意識からだろうが、届け先は難しくなったが、(略)誤魔化した。

とし、親戚や知人などの個人名の宛先を書かず、誰に読まれるかを「(偶然)」に任せ、「何の身辺整理もしない」まま死んだ興津は「自らに律する心に欠けた、精神の弛緩した武士像」であると批判する。

親類など知人に葬儀を頼まなかったことの疑問を解くために、遺書に固有名詞の宛先がないことに注目したい。鷗外がこの遺書を実際に読ませるのは興津の庵の近くに住む「皆々様」ではなく、読者である。つまり遺書の宛先は読者なのである。そのように仮定し乃木と興津を対照とするならば、以下のような読みが可能になる。

すなわち、主君の命令を守るために同僚を殺したことで忠誠心を記録されるまでに知られている興津に対し、乃木は佐々木英昭<sup>(24)</sup>によれば西南戦争の戦闘中に政府軍の軍旗を奪われ、さらに日露戦争で第三軍司令官として指揮をとった旅順戦で多くの兵士を死なせ、天皇を始めとする絶大な人気があったとはいえ、現代に至っても愚将と批判されることもある<sup>(25)</sup>。二つの汚点を持った乃木の葬儀は国葬ではなかったが、佐々木は少なくとも十数万の国民がすすんで参列したという内田魯庵の日記を引いている。大罪を背負った將軍の死をそれほど悼むことができるのなら、主君から与えられた仕事への強い義務感を見せ、また徳川幕府の封建制に染まらず、自分で死に方を含めた生き方を決めた無名の侍に、あの世へ送り出すまでの尊敬の念を抱けるかという問いかけが読者に対して突きつけられていたのではなかったか。

#### 四 鷗外の天皇機関説

美濃部達吉が『憲法講話』で天皇機関説を発表したのは一九一二年三月である。これは天皇機関説事件を経て国体明徴声明が出されるまで、およそ三十年の間定説であり続けた優れた学説である。

初出に附された後記にある通り、「興津」は江戸時代の史実から着想を得ている。しかし、他方で明らかに鷗外は乃木の殉死に誘発されて書いている。乃木が忠誠を捧げた明治天皇は単なる為政者にとどまらず、東北巡幸中に滞在した民家の中を一目見ようと十日で十万人の人が押し掛け、門扉が一度踏み破られたため見物に切符が必要になる事態となり、さらに座るのに使った敷物をこすった手で自分の体をこすると病気になるなど信じ人がたくさん出たほど強く崇められていた。大日本帝国憲法下での天皇は絶対的な存在であり、しかも鷗外と乃木を含めた当時の国民にとっては共に激動の日々を過ごし、西洋列強の植民地にされる危機を乗り越えた明治天皇である。美濃部も『憲法講話』<sup>(26)</sup>の中で、

憲政の智識の未だ一般に普及せざること殆ど意想の外に在り。専門の学者にして憲法の事を論ずる者の間にすらも、尚言を国体に藉りてひたすらに専制的の思想を鼓吹し、国民の権利を抑へて某の絶對の服従を要求し、立憲政治の假想の下に其の実は専制政治を行はんとするの主張を聞くこと稀ならず。

と述べ、学問の世界でも天皇を絶対的な専制君主とみる考えが主流の位置を占めていることを憂いている。一方の細川忠興は名門の家柄の人であり、強い力を持つ戦国大名ではあったが、学者から庶民に至るまで広

く絶大な信仰心を得た明治天皇に比肩するまでの存在ではない。

明治天皇のように感情的にも学問的にも広く崇め奉られている人物をモデルとして登場人物を設定する際には、たとえば神々や世界の賢帝たちの中から選ぶのが普通の発想であろう。歴史に名を残した人物とはいえ、朝廷とかかわりを持たず、神の要素も全く持たない人間に置換すること、つまり細川忠興という一大名とその部下の死と、ほとんど神であるとしていた天皇と臣下の死を鵬外は同等に扱っているのだ。

明治天皇と細川忠興の大きな共通点は少なくない数の部下を指揮して国を治める君主であること、その権威が血統と実力によっていることが挙げられる。君主は血統だけでも内乱や侵略を防がないため務まらず、実力だけでも正当性が伴わず常時反感や軽蔑を受けるため、国の安寧を得るのは難しい。細川忠興と明治天皇は共に揺るがぬ血統と実力を持っていた。明治において細川忠興と明治天皇の共通点を見つけ、同じことをしていた存在として書いたことは注目すべきことである。

つまり、軍医を筆頭に国家公務員として数々の職務に関わり、軍を退いた後も死の日まで宮内省図書頭の職に就いていた鵬外は明治天皇を絶対的な君主として考えていたのではなく、自らを含めた大勢の部下に命令を下す上司の役割を務めている人と考えていたのである。まさしく天皇機関説である。『憲法講話』などの美濃部の著作を鵬外が読んだかどうかは鵬外文庫や日記、書簡などの調査が必要だが、彼はその思想を確かに持っており、さらに小説で表現できる程高めていたのである。

## 五 おわりに

本作品は鵬外の一連の歴史小説の最初のものであり、鵬外研究の水準にとどまらず近代文学史の水準においても大いに研究されるべき作品で

ある。しかし、本作品についての論文は『意地』に収録されている本文の研究を含めても、「阿部一族」などに比べ大変少ない。更なる研究が望まれる。

なお、興津が細川の死の直後ではなく十三回忌に死んだことについて、福本論文は「いくら事情があっても、その「死遅れ」はちょっと(ママ)度が過ぎるのである。」として、不自然さを指摘している。続いて福本は作品の中の興津を十三回忌に死んだ史実に合わせるには理由の他に熱烈な感情の描写を必要とする主張する。しかし、十三年の時を経てもなお主君を強く思い続けたことで十分だと言えないだろうか。長い年月を超えて保持されていたことの記述だけで、死への意志が強いことは確保されている。よって激しい感情描写を加える必要はないと考える。

興津が十三回忌にこだわった理由は実際の細川忠興が葬られている臨濟宗大徳寺派の教え、または興津と親しかった同じく大徳寺の清岩(『意地』掲載本文では「清岩」)和尚の考え、細川家が治める肥後国(現在の熊本県にあたる)の習慣で一三回忌が重要視されているためと仮説を立てているが、現時点では推測にとどめる。植島基行によると一七一年に没した藤原通憲の十三回忌が確認されており、興津が生まれる前である十三世紀には一般に普及していたと述べている。機会を見て研究しなく思う次第である。

注

- (1) 『太陽』「気紛れ日記」一九二二年、十八卷十三号
- (2) 三好行雄『近代日本文学史』株式会社有斐閣、一九七五年刊
- (3) 其桐神沢貞幹著、池辺義象校訂。明治三十八年刊
- (4) 竹盛天雄『歴史小説集「意地」おぼえがき―興津弥五右衛門の御書』改

- 作の問題―明治大正文学研究二三号、一九五七
- (5) 尾形功「興津弥五右衛門の遺書」『森鷗外の歴史小説…史料と方法』筑摩書房、一九七二
- (6) 藤田覚「鷗外歴史小説の「史料と歴史」」文学八(二)、二〇〇七
- (7) 前掲論文
- (8) 佐々木充「興津弥五右衛門の遺書」論『国語国文研究』(80)、一九七八
- (9) 蒲生芳郎「鷗外の歴史小説…その始動―中―」『興津弥五右衛門の遺書』の改稿『基督教文化研究所研究論文集』一三、一九八一
- (10) 蒲生芳郎「鷗外の歴史小説…その始動―中―」『興津弥五右衛門の遺書』の改稿『基督教文化研究所研究論文集』一三、一九八一
- (11) 前掲論文
- (12) 前掲論文
- (13) 蒲生芳郎「鷗外の歴史小説…その始動―下―」『興津弥五右衛門の遺書』の改稿上の問題点をめぐって『宮城学院女子大学研究論文集』五六、一九八一
- (14) 蒲生芳郎「鷗外の歴史小説…その始動―中―」『興津弥五右衛門の遺書』の改稿『基督教文化研究所研究論文集』一三、一九八一
- (15) 三好行雄「鷗外と漱石…明治のエートス」力富書房、一九八三
- (16) 乃木の死は九月十三日であり、鷗外日記に原稿が十八日に中央公論社に渡された記述がある。
- (17) スタンレイ・ウォシユバーン『乃木大将…戦争を背景として立つ偉大な人物』甲陽書房、一九七四
- (18) 前掲論文
- (19) 前掲論文
- (20) 山田有策「五条秀磨のいる世界」『解釈と鑑賞』四五(七)
- (21) 小林浩一郎「森鷗外―「かのやうに」論―主題把握への試み(作品論の新規角)」『日本文学』二二(一一)、一九七二
- (22) 宮崎隆弘「興津弥五右衛門の遺書」論『語文研究』五四、一九八二

- (23) 福本彰「興津弥五右衛門の遺書」(初稿文) 考―ジレンマを網渡りした鷗外の熱意の底―『就実語文』一六、一九九五
- (24) 前掲書
- (25) 司馬遼太郎『坂の上の雲(一九七二年)』『殉死(一九六七年)』の影響力を微々たるものとすることはできない。
- (26) 前掲書
- (27) 1項と同じ。
- (28) 遠山茂樹『日本近代思想大系2 天皇と華族』岩波書店、一九八八
- (29) 美濃部達吉『憲法講話』有斐閣、一九二二(国立国会図書館近代デジタルライブラリーによった。該当URLは <http://kindai.ndl.go.jp/BIBDetail.php>)
- (30) 前掲論文
- (31) 植島基行「十三仏について―上―」『金沢文庫研究』二二(一一)、一九七五

#### 参考文献

- 中央公論社『中央公論社の八十年』中央公論社 一九六五
- 半田美永「森鷗外の「殉死小説」試論―『興津弥五右衛門の遺書』改作の場合―」皇学館論叢四(三)、一九七一
- 武藤光磨「鷗外の歴史小説覚え書…『興津弥五右衛門の遺書』にみえる殉死の問題を中心に」『熊本大学教育学部紀要 第二分冊』二二、一九七二
- 蒲生芳郎「鷗外の歴史小説の原点―「羽鳥千尋」と初稿本『興津弥五右衛門の遺書』との意義―」『文学』四三(二)、一九七五
- 須田喜代次「興津弥五右衛門の遺書」試論『近代文学論』九、一九七八
- 蒲生芳郎「鷗外の歴史小説…その始動・上」『興津弥五右衛門の遺書』の成立まで『宮城学院女子大学研究論文集』五四、一九八一
- 渡辺善雄「鷗外「諦念」の流動性―「かのやうに」を視座として」『文芸研究』一〇五、一九八四
- 松井利彦「森鷗外の士道―『興津弥五右衛門の遺書』」『東海学園女子短期大学

紀要』二三、一九八七年

山崎一穎『興津彌五右衛門の遺書』（初稿）覚書』『国文学科報』一九、一九九一

藤森賢一「軍旗と香木——興津弥五右衛門の遺書」の問題『岡大國文論稿』一九、一九九一

宮崎隆広『興津弥五右衛門の遺書』論』『語文研究』五四、一九八二

猪狩友一『興津弥五右衛門の遺書』における語りの構造『日本近代文学』五二、一九九五

栗坪良樹『興津弥五右衛門の遺書——遺書の形式とその弁明』『森鷗外研究』六、一九九五

河野至恩「伝記的スケッチとしての「錠一下」」鷗外六八、二〇〇一

大塚美保「国家を批判し、国家を支える——鷗外「秀麿もの」論」『文学』八（二）、二〇〇七